様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月２９日現在

機関番号：３１５０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2010
課題番号：２１７２０２２６
研究課題名（和文）東京における紙芝居文化の成立と発展に関する包括的研究
ーデジタル化の実践とともにー
研究課題名（英文）Integrative Study on the Formation and Development of *Kamishibai* (picture story show) Culture in Tokyo
研究代表者
吉田　正高（YOSHIDA MASATAKA）
東北芸術工科大学・デザイン工学部・准教授
研究者番号：３０３９６８５８

研究成果の概要（和文）：本研究では、現在の大衆文化の源泉として重要な存在である「紙芝居」文化を主たる研究対象とした。とりわけ紙芝居が盛んであった東京を調査フィールドに設定し、現役紙芝居師の協力をもとに、これまで実施されてこなかった精緻な資料学的なアプローチを用いて資料の整理・調査を実施した。さらに、そこで得られた諸データを包括し、デジタルデバイスを活用して平易に再生できるシステムを開発した。

研究成果の概要（英文）：
In this study the author primarily researched the culture of *kamishibai* (picture story show), which is an important source of modern popular culture. Tokyo, where *kamishibai* was especially active, was chosen as the investigative field; with the cooperation of present-day *kamishibai* producers, the author utilized a previously untested precise material science approach to organize and investigate materials. Furthermore, the author integrated the various data thus acquired, and utilizing digital devices developed a system able to easily reproduce the data.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,900,000	570,000	2,470,000
２０１０年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：文化史、デジタル・アーカイブ

１．研究開始当初の背景

近年における昭和以降の大衆文化に関する研究は、さまざま学問領域において一層の活況を呈している。そのような状況をふまえた時、海外からも高い評価を得るコミックやアニメーションの独自の進化を考察することは、現代日本の大衆文化史を総覧し、ひいては大きな意味での文化史の一側面をあきらかにすることにほかならない。

本研究代表者はこれまで１９５０年代のコミック（主に雑誌附録）の整理・分析とデジタル化および活用に関する研究（平成１７年度～１８年度　科学研究費助成金　若手研究Ｂ　課題名「コミックのデジタル・アーカイブを地域文化資料として活用するための実践的研究」）や、同じく終戦直後に大量に

出版されたいわゆる「カストリ雑誌」の分類・分析およびデジタル化に関する研究（平成１９年度～２０年度　科学研究費助成金若手研究Ｂ　課題名「５０年代のカストリ雑誌に関する文化史的実証研究」）などの分野で研究活動を続けてきた。その一方で、上記のようないくつかの分野での実証的な研究をすすめることによって、コミックやカストリ雑誌を生み出した源泉として、昭和初期以来の大衆文化研究をより広範な時間軸をもって、歴史学的な視点からより包括的に考察する必要性を実感するようになった

そんな中にあって、日本を代表する文化として称賛されているコミック、アニメーションの源泉と呼べる文化が「紙芝居」である。

明治期の見世物に原型が求められる紙芝居が、現在のような形態に落ち着いたのは昭和初期のことであり、全国の子供たちに愛好され、大きな流行現象を生み出した。その後も、時々の世相に応じて軍事・教育・道徳などの色彩を帯びながらも、戦後昭和３０年代までは、大衆娯楽、特に児童文化の一つとして生き続けた。

紙芝居は、一定のストーリーに沿った場面を紙に描き、これを順に提示しながら読み聞かせをするという、世界的にみても稀有な大衆娯楽である。一方で紙芝居というモノ単体ではほとんど機能せず、そこに実演を行う「紙芝居師」が存在して一つの形態を生み出しているという意味でも、ユニークな文化と考えられる。

２．研究の目的

紙芝居という独自の文化に対して、学術研究の分野においても、これまでにいくつかの成果を生み出しているが、不足している点があり、大別すると次の３点となる。

① モノとしての紙芝居を考えた時に、資料学的なアプローチが欠如しており、特に昭和初年の極めて貴重であるはずの手描きの紙芝居に関してさえ、具体的な保存処置などの動向がみられない。

② 前述のとおり、紙芝居は紙芝居師がいてこそ成立する文化であるが、現在では紙芝居師の高齢化が加速し（現役紙芝居師の多くが８０歳をこえる年齢である）、彼らの芸そのものや体験をなんらかの形で保存することは急務であるが、ほとんど成果がみられない。

③ 地域性に関する考慮をする必要がある。具体的に述べるなら、大阪と東京での紙芝居には、興行組合編成、モノとしての紙芝居の性質、現在における継承状況などに大きな違いがあることが知られている。

つまり、紙芝居研究進展のためには、資料としての紙芝居文化の包括的な保存・記録の方法論確立と地域性に対する相違点の認識が必須となる。以上のような状況に鑑み、現在の大衆文化の創造にあって重要な存在であった「紙芝居」を主たる研究対象とし、これまで実施されてこなかった精緻な資料学的なアプローチを用いて、今後の紙芝居研究の基礎の構築を研究の目的とした。

本研究を成就させることで、「紙芝居」という日本独自の大衆文化を歴史的に研究する基礎を固め、また、文化として将来に継承するための足掛かりつくるなど、今後の日本の大衆文化史研究の発展に寄与することができると考えた。

３．研究の方法

(1) 基礎資料の整理・分析
まずは個々の資料の適切な保存とコンディション調査、さらにその整理・記録に作業を集中し、基礎データの蓄積をおこなった。研究協力者である現役紙芝居師の梅田佳声氏が所有する紙芝居関連資料の全容を明らかにするため、その整理・分類作業を実施した。なお、資料の整理・分類については、歴史資料調査の経験を有する博士課程以上の大学院生を臨時の従事者として雇用した。

また、上記の作業と並行して、梅田氏より情報提供を受けながら、都内で現在も活躍されている紙芝居師や、現役を引退された紙芝居師をたずね、紙芝居に関する往時の様子や現在の実態などを聞き取り調査した。

(2) デジタル・アーカイブの実践
基礎的調査（前述の(1)）によって取得されたデータをもとに、デジタル化によるアーカイブ作業を行った。

まずは梅田氏所有の手描き紙芝居のデジタル化を実施した。ついで調査の中で発見された都内在住の紙芝居師達が所有する手描き紙芝居のデジタル化にも着手した。ここでは絵が描かれた表面と詞書の書かれた裏面ともに高精細なデジタルカメラでの撮影を実施した。

ついで、紙芝居師に実演を行ってもらい、いくつかの角度（広角、接近および重要ポイン

ト）を設定してデジタルビデオカメラで撮影し記録する。さらに、その記録映像を分析し、紙芝居というモノと紙芝居師との関係性を考察した。

最後にデジタル化した手描き紙芝居のデータを包括的にデジタルデバイスに格納し、自由に再生・加工が可能な形態にまとめた。

４．研究成果

(1) 梅田氏所蔵資料の整理・分析
現在も紙芝居師として活躍されている梅田佳声氏のご協力を仰ぎ、ご自宅および下町風俗資料館に寄贈されている肉筆紙芝居全点調査を実施した。延べ５日間の調査によって、３５０タイトルの貴重な資料の存在があきらかになった。ここでは、タイトル・寸法・枚数に加えて、肉筆紙芝居の表面・裏面に記された紙芝居師や貸出元による印や書き込みなど、重要な書誌的データも同時に採取し、これをもとに整理・分析を進めることができた。

上野・下町風俗資料館での調査風景

肉筆紙芝居の検査印

(2) 新規資料の発掘と整理・分析
東京都を中心とした肉筆紙芝居の残存状況調査の過程において、①東北地方の古書店より４タイトル（１８巻・１９８点）、②東京都では最高齢の現役紙芝居師・永田為春氏より貴重な肉筆紙芝居を３タイトル（２０巻・２１１点）、それぞれ寄贈・購入した。①に関しては、全巻揃いではないものの各地の紙芝居師にまわり持ちで貸し出されていた当時の確認印などがそのまま残されており、肉筆紙芝居の貸出システム解明に関わる手掛かりとなり、②に関しては、全巻が揃っている上、裏面には実際に永田氏が口演する際に活用した台詞回しなどに関する書き込みが多数あり、紙芝居師の創意工夫の変遷を知ることができるなど、大変に貴重な資料であった。

永田為春氏が所蔵していた肉筆紙芝居『鉄仮面』

(3) 紙芝居研究分科会の設立と運営
一連の肉筆紙芝居の研究について、学術団体「コンテンツ文化史学会」の部会活動として認定していただき、学会の発行する『コンテンツ文化史研究』第２号以降、その活動および研究成果の一部を公開した。これによって、科学研究費による研究終了後も、肉筆紙芝居の研究を共同で実施していく仕組みが確立できた。

(4) 紙芝居実演のアーカイブ
東京都最高齢の紙芝居師・永田為春氏より購入した貴重な肉筆紙芝居のうち、絵・内容ともに優れている『殺人鬼』（全９巻、各巻１１枚）を選び、紙芝居師がどのように原作を解釈し、自分にあった内容に改変したのち、上演していくのかという本研究の根幹的な課題の解明について、本研究にご協力いただいている現役の紙芝居師・梅田佳声氏に依頼して、それら一連のプロセスを再現していただき、また、同氏の指導・監修のもと、その一連の過程も正確に記録した。さらに梅田氏には実際に観客の前で肉筆紙芝居『殺人鬼』を実演していただき、その様子もデジタルビデオカメラで撮影・記録した。

梅田佳声氏による『殺人鬼』実演の様子

(5) デジタルデバイスへの格納
これまでの調査・研究で得られたデジタル・データを集積・統合した上で、サイフォン合同会社の協力を得て、デジタル・デバイス

（Apple 社製の iPad を活用）に収納し、紙芝居師が演じる微妙な間や演じ分けという精緻な部分まで再現ができるシステムを開発した。これによって、「紙芝居」を用いて「紙芝居師」が工夫をして上演をするプロセスで完成する「紙芝居文化」自体のデジタル・アーカイブを実践した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔その他〕
『コンテンツ文化史研究』２号（2010 年、コンテンツ文化史学会発行）に「紙芝居文化研究分科会」の活動報告を、資料調査の手法およびその成果を中心に掲載。

６．研究組織
(1)研究代表者
吉田　正高（YOSHIDA MASATAKA）
東北芸術工科大学・デザイン工学部・准教授
研究者番号：３０３９６８５８